

『聖体に育まれて』

ルチア 須藤 ヨシ子

主のご受難と十字架の愛は、ご聖体の内に凝縮されて、ミサの中心として日々私たちの心と体を養ってくれます。

二十代の初めに、ある修道会で要理の勉強をしていました。シスター方の身分の差別に躓いてそこを去り、しばらくして日本基督教団で洗礼を受けていた時に、心の奥で私は聖体にひかれてカトリックに改宗するのではと、不思議な思いになっていたことを今でも忘れません。そのころはご聖体についてはよく解っていませんでしたが、何かある時にはカトリック教会の十字架とご聖体の前で祈っていました。

それから八年後に東京の関口教会でカトリックに改宗し、初ミサでご聖体を頂いて、主イエス・キリストが私のうちにおいで下さったよるこびは全身に浸み入り、感謝にあふれて涙がとまりませんで

した。この時の思いを大切に、信仰を深めようと道をさぐって来ました。毎日のミサに参加できるように努めてきました。一年後に聖母カテキスタ学院に入り、聖体降福式にあづかれて、ご聖体もつと身近ななつてきました。しかし弱い私はいつも熱心が続いているわけではなく、ミサに参加することもマンネリ化していることに気が付き、ミサとは、聖体について学び直しながら再出発をくりかえしてきました。

神言会の西師がご聖体について語られたことを心にとどめています。それは主の御体が十字架にかけられ献げられた、人類を愛するゆえに、そしてミサに於いてパンのかたちで、私たちにはこぼれる。そのパンは石うすですりつぶされ、鉢でこねられ、火で焼かれて、一つのパンが二つに割られ、「これは、私の与える命のパンである」と。イエスはパンを通して私たちに「互いに行く道を示されました。互いに愛し合いなさい」と。この話は私の腹にどんと落ちてきました。この重いことばを日々の生活の中で実践し、人々と分かち合い、

主の命の愛を社会の隅々まで浸透させていくことが信徒の使徒職となつて、世界に和解と平和をもたらし、神の国が実現していくことを祈っています。

